

二〇二二年度

Sr. 江角ヤス特待生選抜 入学試験問題

国語（五十分）（全八ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子中学校

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

政行の両親は、二か月ほど前から一番下の子ども(睦美)を連れて出稼ぎに行っている。

「兄ちゃん」

と、後ろから俊明が声をかけた。

「なんだ」

「俺家のかあちゃん、いつ来んなア」

「もうすぐだ。正月に帰って来んな」

「うん、睦美もがア」

「うん」

「とうちゃんも正月に来つかア」

「わがanne。とうちゃんも来つかもすんにエ。んだげんと、かあちゃんと睦美

は必ず来る」

「うん、うん。——いつ来んな」

「あと三つか四つで、もうすぐだ」

「来たら俺、睦美はソリに乗せてやつぞ」

「だめだ、俊明な、冷たいつめたいって、すぐ泣くべな」

「俺、泣かぬ、泣かぬぞオ」

(中略)

竜坂をすべりおりて道に出ても、下りの道だから、そこも二人で乗りながら  
行ける。止まりそうになるので、体で反動をつけたり、足で雪をけったりして

乗って行くと、いつも来る郵便屋に会った。

「よお大将、遊んで来たな。おまえさ、手紙だぞ。かあちゃんからだ」  
と、郵便屋が言った。

「俺さ来たなア」

「んだ、じいちゃんさ、わだして来た」

政行はソリからおりて、乗っている俊明の背中をぐんぐんおした。勢いあま  
ってソリがひっくり返った。

「兄ちゃん、かあちゃんから手紙来たなア？ すげえー」

「んだんだ。いつ帰って来つか書いてあつぞオ」

「早く行って読むべエ」

「ばか、俺さ来たんだぞオ」

「みやげのことも書いてあんなべが」

「わがanne」

「じいちゃんとはあちゃんの言うごと聞いていたら、正月にみやげ買って来る  
って言ったぞ。俺、言うごと聞いていたも」

「いいから、早く乗れ、行くぞオ」

政行と俊明は家の中に飛びこんだ。家の中が外よりも暗かったから、目玉が  
くらくらして、目の前が真っ暗になった。

「じいちゃん、ばあちゃん、手紙はア」

「じいちゃん、ばあちゃん、手紙イ」

俊明も同じことを言って、どたどたと上がりこんだ。ばあちゃんがにこっと

して、手紙を仏壇から下げてきた。

「いつ来つか書いてあんな、読んで聞かせてみる」

手紙を受け取ると、封筒には大きな字で、安藤政行様と書いてあった。初めてもらった手紙と、自分の名まえに様がついているので、政行はどきどきした。ばあちゃんに、読んで聞かせろと言われたのが、とくいなようで少しはずかしかった。

いろいろばたで、座敷ぼうきを作っていたじいちゃんが、まえかけをバタバタとはらって、

「まんず、早く読んでみる」

と、催促した。

「①エへへへへ、ひとりで読んでがら読んで聞かせる」

政行は俊明をつれて、かあちゃんのたんすのあるなごに入<sup>＊</sup>った。きちんとかたづいている部屋は、殺風景だけど、二人はそこが好きだった。

「だれも見ね。こつちで読め。なんどなど寒くてしようねエベな」

と、ばあちゃんがいろいろのそばで言った。

たんすによりかかって、二人はすわった。

「②エへへへ、安藤政行様だぞオ」

と、一度、俊明にあて名を見せてから、封筒の上ぎりぎりを、ていねいに封切った。

「早くしろ、早く」

俊明がでんぐり返りをした。

「やがましいな、兄ちゃんが読んでから教える」

政行は手紙の字を、一字一字かぞえるように読んだ。エンピツで書かれたていねいな文字は、まだ書いた人の息づかいや、ぬくみが、やどっているようだった。ひとつひとつの文字が頭の中で言葉になると、言葉のかげからかあちゃんの声がしてきた。家にいるとき言われたら、こうるさいことだと思おうようなことでも、素直にうなずけた。

一行ごとにいろんなかあちゃんの顔がかくれている、気のつかないようなことまで見えてきた。大声で笑うのは、あれは男のようだと思えるし、怒ったときは、じろりとらんで、なかなか目をはなさなくなるのが癖<sup>くせ</sup>だったり…。いつも働いてばかりだと思っていたかあちゃんにも、いろんな表情があるので、政行は驚いた。名まえを呼んだり、呼ばれたりするこちよさの中で、政行は読み進めた。

③しかし、それは長く続かなかった。一枚めの終わりの方まで読むと、政行は自分の目をうたがった。こんなはずはないと思った。政行は急いで最後まで読みあげた。そして、すぐ自分にウソダと叫<sup>さけ</sup>んで、もう一度最初から読んでみた。

『たいへん残念なことを書かなくてはならなくなりました。正月はみんなで帰るつもりでしたのですが、とうちゃんたちの仕事の関係で、飯場<sup>＊</sup>に残る人が五人いるので、その人たちのごはんを作らなくてはならなくなり、帰れなくなりました』

その行まで読むと、ウソダと叫んだ自分が、スーと消えてなくなった。政行

は二度三度そこをくり返して読んだ。そして、『帰れなくなりました』というところらにびたりと目が止まって、動かなくなった。目に映った文字は、冬の月のようにさえぎえとした。

政行はじつとそれを見ながら、『帰ります』と、ぼそりと読んでみた。よりかかっているたんすから、冷たさが背中につたわってきた。

俊明が、政行の肩をゆすりながら言った。

「兄ちゃん。なんて書いてある。いつ帰って来るってエ」

「……」

「なア、なア、兄ちゃん。なんて書いてある。いつ帰って来んなだア」

政行は、ニコニコしている俊明を見ると、自分でもはっきりわかる意地の悪い言い方で、

「帰って来ね」

と、④ぶつきらぼうに言いすてた。

「うそだア。おしえろオ、いつ帰って来んなだ」

「帰って来ねって言ったべ」

政行は、俊明の頭をひとつなぐりつけた。

「うそだ。帰って来るって言ったぞ。正月に帰って来るって約束したんだぞ」

そう俊明は言うつと、政行の肩をぐいぐい押しおしてむかってきた。

「ばかやろう。そう書いてあんなだ」

政行はまたなぐりつけた。俊明がワツと泣きだした。

じいちゃんがなんどに入つて来た。

「なんだ、なんだ。けんかすんな」

俊明は泣き続けた。

「どうしたんだ政行、ちっちゃえのを泣かして」

政行は、手紙をじいちゃんにつきつけた。

「じいちゃん、かあちゃんたち、正月帰って来ねって」

「なにイ、どれどれ」

じいちゃんのふしくれだった手の中で、手紙がカシャカシャとめくられた。

「ふうん、そうが。よし、そんなじゃ今度の正月は、いっちよ、じいちゃんもちつくか。なあ、政行も俊明も手伝うべエ」

と、じいちゃんは言うつて、二人の顔を見ながら、自分にうなずくように、うんと頭をふった。

「俺ア、もちなんか食いたくないや」

政行が、封筒をにぎりしめて言った。

「そうがア、政行は正月のもちを食わねえか。俊明は食うかア」

俊明はしゃくり上げながら、じいちゃんの顔を見た。

「食う」

「そうがア」

じいちゃんの赤黒い顔の中で、深いしわがおどった。

「じいちゃん、かあちゃんたち帰って来ねってほんとうかア」

「うん、ほんとうみたいだなア。んでも、みやげを小包で送つてよこすつて書いてあつたぞオ」

じいちゃんは、にこつと笑った。

「やんだ、やんだ」

また俊明が泣きだして、頭を政行の肩にグリグリ押しつけてきた。

「ばか」

政行がげんこつをくれると、ますます俊明は泣きだした。じいちゃんがどなつた。

「政行、おまえは兄ちゃんだぞ」

政行は、その声の大きさにびっくりした。そして、どなったじいちゃんも、やかましく泣く俊明もいやになった。政行は立ち上がり、封筒をそこに投げつけて、外に飛び出した。

薄暗うすくらくなって家にもどった政行は、ばあちゃんの作ってくれたおしるおしるで体をあため、ひんやりとしたふとんに入って天井てんじやうをにらみつけていた。

俊明もやって来てとなりのふとんにもぐりこんだ。そして、ぽつんとつぶやいた。

「かあちゃんに会いたいなア」

「ばかだなア、そだなそ言ことつてもしょうないべな」

俊明が、政行の方に向き直った。

「兄ちゃん、かあちゃんたちに会いたくないがア」

⑤

「うそだア」

今度は向こう側に寝返りをうって、体をまるくしてちぢこまった。

「俺だつて会いたくないぞ」

政行は天井をにらみながら、俺だつて会いたくないさ、と、心の中で言ってみた。

「俺、とうちゃんにも睦美にも会いたくないぞオ」

そう言いながら、俊明はしゃくり上げた。

「ばか、泣くな」

そのとき、政行は思い出した。ふとんをはねとぼし、机のひきだしを引きぬいてひっくり返した。

「あつた」

政行は一枚の写真を持っていた。それは今年のお盆ぼんに、おじさんが来たとき、家の前でとってもらったものだった。俊明をまんやかに、じいちゃんとはあちゃんがしゃがんでいて、後ろにとうちゃんとかあちゃんが立っていた。政行はかあちゃんのわきで、睦美がとうちゃんにだっこしてもらっている。みんなの笑った顔が政行には、ちよつとまぶしかつた。

写真の端はしのなつめの木の下に、とうちゃんのズボンが干してある。夏には七人分のせたく物が、ものほしざおに並ぶし、七人分のはきものも、玄関げんかんいっぱいにちらかる。笑い声、泣き声、怒おこる声、わいわい、ガヤガヤ。——夏の生活が思い出された。どんだんひろがっていく夏のできできごとに、ふつとうれしくなった。⑥けれど、はらわたのどこかが、ぞうきんのように、ぎゅつとしぼられるような気がした。

「俊明、いい物見せてやるぞ。かあちゃんもとうちゃんも睦美もいるぞ」

俊明はふとんからとび出して、写真を見た。

「ああ、みんな写っている。俺もいる」

「今年の夏の写真だ」

「じいちゃん、俺、ばあちゃん、とうちゃん、睦美、かあちゃん、兄ちゃん」

うけとった写真の中のひとりひとりを、たしかめるように見ながら、俊明がみんなの名まえを呼んだ。

「かあちゃんだ……」

俊明は写真を見ながら、ふとんの中に入って行った。政行はびっくり返したカードやがらくた類をもとにもどして、引きだしを机の中に差し入れた。俊明がまたしゃくり上げたので政行はふり返った。すると、俊明が写真を舌の先でペロペロなめていた。政行は驚いた。それといっしょになにかが、ぐつとこみ上げてきた。

「そだななめんな、写真だぞ」

そう言っても、俊明はやめなかった。

「なめんな、ばが」

政行はおもわずげんこつをくれて、取り上げた。写真は、ぴたぴたぬれていて、笑ったかあちゃんの顔がにじんできた。俊明がワツと泣き出した。政行はすぐに俊明のふとんにもぐりこんで、俊明といっしょにふとんを頭からかぶった。

「泣くな、泣くな」

政行は、俊明を抱きかかえてそう言った。

「ばかだなア、写真なんかめて」

政行も、このまま泣きたかった。けれども⑦泣かなかった。

「よし、あした、また竜坂に行くべ、なア、一番てっぺんから乗せでやつぞオ。それから、家の前さでつかいかまぐらも作ってやつぞオ。俊明のかまぐらにしていいぞオ。なア、んだから泣くな」

政行は、なんとか俊明をよろこばしてやりたかった。自分よりずっとちっちゃい俊明なら、自分よりもつかあちゃんたちに会いたかったにちがいない。そう政行は気がつくとき今にもウウウウと泣けてきそうになる自分をしかりつけた。

そのうち俊明は静かになった。眠ってしまったようだった。政行はホツとして、ふとんから頭を出した。そして、ねてしまった俊明に、

「あと四か月だ。四か月のがまんぞ。もうすぐだ、がまんしろ」

と、小さな声で言ってやった。

政行は天井を見て、

「あと五日で正月かア」

と、つぶやいた。

それから、⑧ふとんの中で、一月、二月、三月、四月と指をおつてみた。

(最上一平『銀のうさぎ』より。なお、本文には省略等があります。)

\*1 なんど……衣服や道具をしまっておく部屋。

\*2 飯場……土木工事などで働く人たちの宿舎。

問一 — 線①・②「エへへへ」とありますが、政行のどのような気持ちから出た笑いだと考えられますか。それぞれひらがな五字で答えなさい。

つて、説明しなさい。

問二 — 線③「しかし、それは長く続かなかった」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) 「それ」の指す内容をわかりやすく説明しなさい。
- (2) 「それ」が「長く続かなかった」のはなぜですか。説明しなさい。

問三 — 線④「ぶっきらぼうに言いすてた」とありますが、政行が俊明にこのような態度をとったのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 — 線⑤に入る言葉を考えて、十字以内で答えなさい。

問五 — 線⑥「けれど、はらわたのどこかがくしぼられるような気がした」とありますが、これはどのようなことですか。八十字以内で説明しなさい。

問六 — 線⑦「泣かなかった」とありますが、それはなぜですか。七十字以上八十字以内で説明しなさい。

問七 — 線⑧「ふとんの中で指をおってみた」とありますが、この表現から政行のどのような気持ちを読み取れますか。「夏の写真」という言葉を使

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学生の悩みで、一番多いのは友人についてだという。ぼくなんか、それを聞くと、青春をなつかしんで、うらやましくなってしまう。

①心がすっかり通じあった、なんでも語りあえる友、というのはいいものだ。だれもいつとき、それを夢みる。

しかし、本当のところは、そんなものはないと思う。

心が本当に通じあったら、気味が悪い。人間と人間とは、どんなに通じあっているようでも、いくらかはすれ違う。それが、他人の間の自分というものだ。他人とは、自分と違う心を持ち、自分と微妙に心がすれ違うので、自分にとって意味を持つ。

そうしたすれ違いから、人間と人間のドラマが生まれる。そうしたすれ違いから、新しい発想が生まれ、議論が創造へと発展する。だれひとりとして同じ心を持たない、この人間たちの意味はそこにある。

また、なんでも話しあえる、というのも嘘だろう。嘘でないとしても、そんなになんでも話してしまつては、自分がなくなってしまう。自分だけのために、なにがしかは、心の底にとつておくものだ。それが自分の心の重荷になろうとも、それを支えるのが、自分というものである。

こうしたことを無視して、友人と考えていては、裏切られて当然だと思つ。それに、あんまりベツタリした友人関係は、長持ちしないものだ。(中略)

本来は、友人というのは、それぞれに自分の心をとっておきながら、ふれあ

いのなかでいたわりあうものだろう。それは、完全には重ならず、完全には通じあわぬ、断念の上で成立する。

しかし、きみたちにしても、そんなことは、無自覚にしる、承知の上のことかもしれない。自分と他人が、それぞれに確立したうえで、おたがいに関係をとり結ぶこと、そうしたことへの一種のおそれが、友人についての夢を持たしているのかもしれない。

それは、ぼくにも多少はおぼえがある。自分が他人と違う自分になっていくこと、他人を自分と違う人格と意識していくこと、そうした過程の反動として、②自分と一体化した他人として、友という幻影を求める。それが、青春の一時期であるにしても、そうした幻影を持てればしあわせである。

ただし、幻影はやはり幻影である。そして、友人が持てないというのは、幻影が持てないということだけで、友人ができないと悩むほどのこともあるまい。

そしてやがて、自分とは違った心を持った他人との、友人関係が作られていくと思う。そのとき、きみはだれでもないきみ自身の心を持ち、そして友人もまた彼自身の心を持つことを、たがいに認めあうだろう。彼は、きみと違っていて、心がすれ違うからこそ、友人となる。

自分と似た人間を求めて、友人を作るというのを、ぼくはあまりすすめない。たしかに、自分と似ているだけに、つきあいやすい。しかし、あきやすかったり、③につきやすいのも、自分と似た相手だ。

なるべくなら、どんなグループにあつても、そしてそのグループの人間が自

分と似ていなくても、そのなかでこそ、友人ができたほうがよい。そこで、自分に似た相手を探しても、見つからないだろう。

自分と性格が違い、自分ともの考え方の違う相手のほうが、友人としてはおもしろい。違う考えをしたり、意見がくい違うからこそ、関係をとり結ぶ意味があるのだ。似た相手より、似ない相手を探してみたらどうだろう。それなら、友人になれる相手は、いくらでもいる。

似たもの同士が群れあうのは、ぼくはむしろつまらなく思う。④違和感を持つグループのなかでこそ、友は必要なのだ。

それは、自分の人格を確立し、他人の人格を認めるようになることでもある。自分と違った心を持った他人の価値を知ることである。他人の心を大事にできるためには、自分の心を大事にできなければならないが、そうしたなかで友は作れる。

でも、青春、自分が確立していくなかで、友を求めて悩むのは、自然なことだ。そうした悩みは、青春にはあってよいと思う。少なくとも、友ができないと断念して、自分の殻かにこもったりはしないことだ。求めることなく、殻にこもったりしては、その自分が作られることもない。自分というものは、こうした過程を通じてだけ作られるもので、自分の殻のなかで自分を作るわけにはいかない。⑤人間というものは、さなぎの中ちゅうにあつて蝶ちょうになるものではない。

(森毅『まちがったっていいじゃないか』より。なお、本文には省略等があります。)

問一——線①「心がすっかり通じあった、なんでも語りあえる友」とありますが、対照的な内容をあらわしている部分を本文中から十四字で抜き出さない。

問二——線②「自分と一体化した他人として、友という幻影を求める」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って、五十字程度で説明しなさい。

問三——線③に適切な言葉を入れて「うつつうしくていやになる」という意味を持つ慣用句を完成させなさい。

問四——線④「違和感を持つグループのなかでこそ、友は必要なのだ」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問五——線⑤「人間というものは蝶になるものではない」とありますが、「蝶になる」とはどのようなことをたとえたものですか。次の空欄くうらんに合うように、説明しなさい。

人間というものは、というものだ。